

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	青野 颯太
論文担当者	主査 池内 浩基
	副査 若林 一郎
	副査 新村 健
学位論文名	Epidemiology and Clinical Characteristics Based on the Rome III and IV Criteria of Japanese Patients with Functional Dyspepsia (日本人における Roma III, IV基準を用いた機能性ディスペプシア 患者の疫学研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>【背景と目的】機能性ディスペプシア (Functional dyspepsia: FD) の診断には RomeIIIまたはIV基準が用いられるが、どちらの基準を用いるかで一部のFD患者では病型が食後愁訴症候群 (Postprandial Distress Syndrome: PDS)に分類される症例と、心窩部痛症候群 (Epigastric Pain Syndrome: EPS)に分類される症例になるなど、病型が異なるという事態を生じる。そこで申請者は対象患者に対し、RomeIII, IV基準の2つの基準を同時に用いて、その診断能を調査し、消化器症状、健康関連QOL、不安や抑うつなどの心理的因子に与える影響を検討し、両基準を用いた病型別に適切な治療法を明らかにすることを目的に本研究を行った。【対象と方法】兵庫医科大学病院および8施設の関連病院において、上腹部症状を訴えて病院を受診し、FDと診断された患者に対して、消化器症状や健康関連QOL、心理的因子に関する自己記入式アンケート調査を実施した。【結果】アンケートを取得し得た症例(205名)のうち54.1%(111名)がFD患者であった。RomeIII基準におけるFD患者の病型の割合は、EPSが19%(21名)、PDSが38%(42名)、EPSとPDSのoverlapが43%(48名)であったが、RomeIV基準では食後に上腹部症状が起こる患者が全てPDSに分類されることでoverlapが17%(19名)に減少し、PDSが64%(71名)に増加した。RomeIII基準からRomeIV基準でoverlapからPDSに病型が変わった患者は、RomeIII基準とRomeIV基準ともにPDSで病型が変わらなかった患者と比較して、早期満腹感が有意に少なく、酸逆流スコアと腹痛スコアが有意に高い結果であり、食後の酸逆流によるEPS症状が強く出現している可能性が考えられた。【結語】RomeIII基準からRomeIV基準に変わることで、overlap患者が減少し、PDS患者が増加しており、より明確にPDSとEPSの分類分けが可能であった。RomeIII基準からRomeIV基準でoverlapからPDSに病型が変わった症例では、食後の酸逆流症状が強いことが示唆されたことから、このような患者群では消化管運動改善薬よりもむしろ、酸分泌抑制薬を使用する方が好ましい可能性が示唆された。本論文は2つの基準を同時に用いることにより、FDの病型分類を正確に行い、病型別の選択されるべき薬剤を明らかにしたものであり、学位に値するものと判断した。</p>	